

日本学会議の 「教育課程編成の参照基準」

東京工業大学・国際基督教大学名誉教授

北原和夫

2019/10/27@日本学会議

「学士課程教育の構築に向けて（審議のまとめ）」

2008年4月中教審

・「グローバルな知識基盤社会、学習社会を迎える中、我が国の学士課程教育は、未来の社会を支え、よりよいものとする「21世紀型市民」を幅広く育成するという公共的な使命を果たし、社会からの信頼に応えていく必要がある。」

・「このため、今後、各分野の教育を振興する基盤づくりに向け、学協会や大学団体に対し、国として積極的な支援を行うことが必要である。最近では、細分化されていた協会の連合化の動きが進んできており、そうした基盤の素地もできつつある。このような学協会等の役割に期待しつつ、これを促進し、かつ共通理解に立った対応がなされるよう、文部科学省として、日本学術会議に審議依頼を行い、各分野の学位水準の向上など質保証の枠組みづくりに向けた取組みを進めていくことが適当である。」

- 2008年5月：文科省から日本学術会議に「学位の水
準の維持・向上など大学教育の分野別質保証の在り
方についての審議依頼」
- 6月に「大学教育の分野別質保証の在り方検討委員
会」が設置
- 三つの分科会「質保証の枠組み検討分科会」「教養
教育・共通教育検討分科会」「大学と職業の接続検
討分科会」を立ち上げて議論
- 2010年7月：回答「大学教育の分野別質保証の在り
方について」を取りまとめて公表
 - 第一部：質保証の枠組みについて
 - 第二部：教養教育の在り方について
 - 第三部：大学と職業の接続について

第二部：教養教育の在り方について

**「21世紀型市民」の教養として、
現状を認識して賢く適応する「適応力」
ではなく、現状に積極的に関わり
応答・変革を志向する「対応力」
responsibilityを提案**

第一部：質保証の枠組み

多様な大学が存在する状況の中で、一律の標準を策定するのではなく、各分野の教育のコアとして共有すべき基本を提示する「教育課程編成上の参照基準」の策定を提案。

- (1) 「世界の認識の仕方」並びに「世界への関与の仕方」の視点から各学問分野の定義・特性
- (2) 全ての学生が身につけるべき基本的な素養
- (3) 学習方法・学習成果の評価方法に関する基本的な考え方
- (4) 市民性の涵養を巡って専門教育と教養教育との関わり

2010年の「回答」の後、日本学術会議が「参照基準」の策定に取り組む。

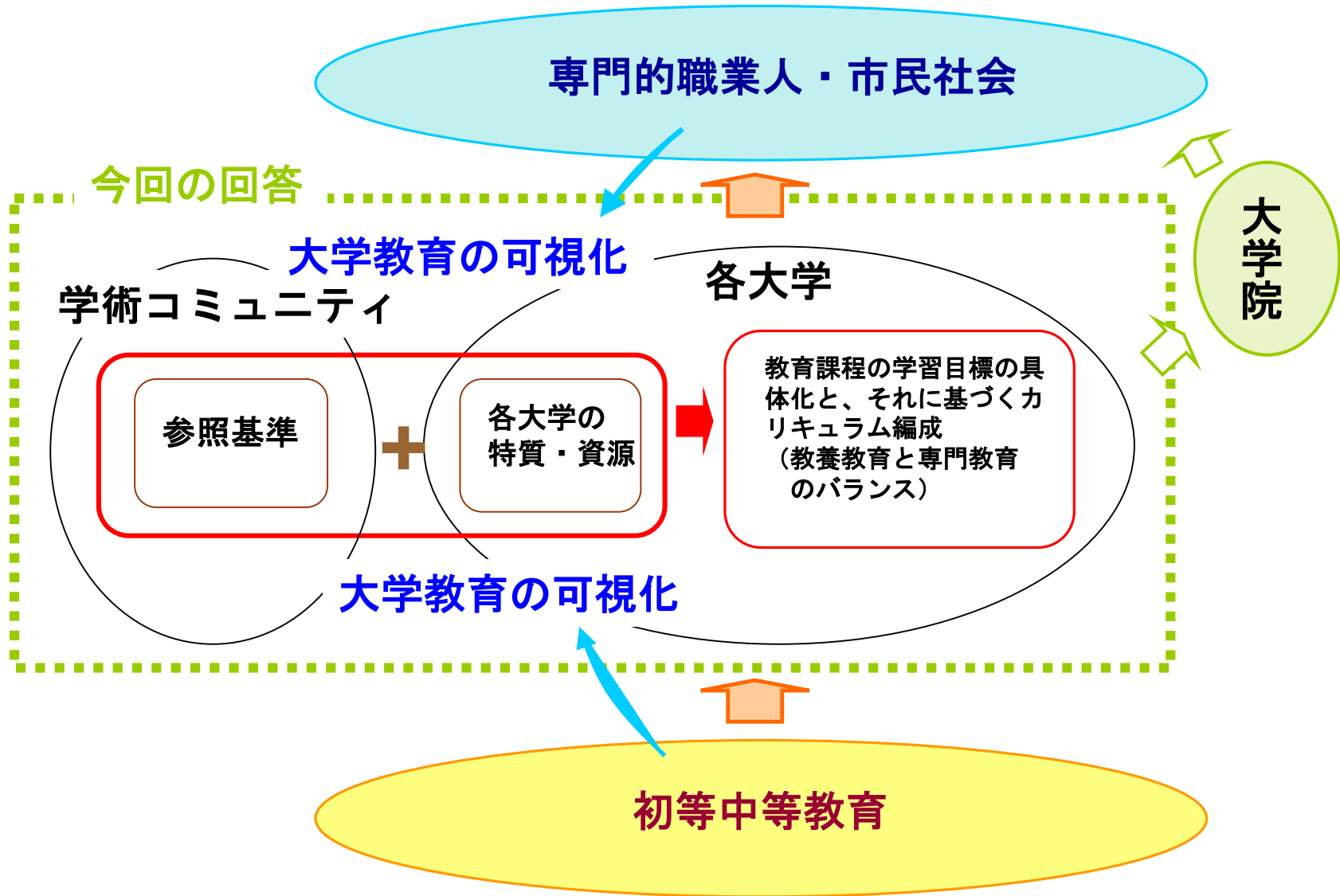
- **第一部：経営学** (2012/8/31) **法学** (2012/11/30) **言語・文学** (2012/11/30) **政治学** (2013/9/10) **経済学** (2014/8/29) **歴史学** (2014/9/9) **地理学** (2014/9/30)、**心理学** (2014/9/30) **文化人類学** (2014/9/30) **社会学** (2014/9/30) **地域研究** (2014/9/30) **社会福祉学** (2015/6/19) **哲学** (2016/3/23) **サービス学** (2017/9/8)
- **第二部：家政学** (2013/5/15) **農学** (2015/10/9) **薬学** (2017/8/17) **看護学** (2017/9/29) **歯学** (2017/9/29)、**医学** (2017/9/30)
- **第三部：機械工学** (2013/8/29) **数理科学** (2013/9/18) **生物学** (2013/10/9) **土木工学・建築学** (2014/3/19) **電気電子工学** (2014/7/29) **材料工学** (2014/9/1) **地球惑星科学** (2014/9/30) **統計学** (2015/12/17) **情報学** (2016/3/23) **物理学・天文学** (2016/10/3) **計算力学** (2017/8/8) **化学** (2019/2/21)

全ての関係者が自由に利用できる

もともとは、大学教育課程編成に関わる人々のためであったが、各分野を俯瞰するとともに、学問全体を俯瞰するものとなる。

- 学問に携わる人々：各分野のミッション、アイデンティティーの確認、異分野間の相互理解・協働の促進
- 中等学校の関係者（教員・生徒等）：大学の教育のコアが見えてくる。進路指導に役立つ。
- 大学卒業生を受け入れる職業社会：学生の履修した内容を知る機会となる。

一人一人の学習者にとって大学教育が意味あるものとなるために



経営学の参照基準

「経営学は、営利・非営利のあらゆる継続的事業体における組織活動の企画・運営に関する科学的知識の体系である。営利・非営利のあらゆる継続的事業体の中には、私企業のみならず国・地方自治体、学校、病院、NPO、家庭などがある。…営利・非営利の継続的事業体はそれを取り巻く社会と相即的に発展する必要があり、社会秩序全体との整合性を自己点検する必要がある」

- 倫理的であることを教育に求めている。
- 多数の各論学会が一つにまとまった。

工学系の参照基準

- **機械工学、土木工学・建築学、電気電子工学、材料工学**
- **基本的構造：原材料→デバイス→価値
エネルギー・情報→エレクトロニクス→より良い
エネルギー・情報
エネルギー・情報→マシーン→より良いエネルギー・情報**
- **より良い価値の創造のためには、人文学、社会科学、芸術、体育・スポーツなどの素養が役立つ（教養科目を学ぶ意味）**

学生にとっての「参照基準」

- 「参照基準」によって各教科、学科の教育のゴールが見えてくる。
- 学科間の授業の交流の可能性：学生の学修機会の広がりの可能性
- 大学間の学生流動、大学院進学の流動性
- さらに国際的な学生流動による履修機会の拡大。EUのTuningとの連携、エラスムスの土台となった運動の一つは、Europhysical Society（欧州物理学会）の Students Mobility Scheme

学生の声

理科大における教養科目「特別教養講義」（学部）、「科学文化概論」（大学院）で「参照基準」を取り上げ、学生の感想を集約。

- 「社会福祉分野の参照基準」について（化学専攻院生）学習者の基本的素養として、個人の尊厳を重視して支援する能力を挙げている。現代の社会人・学生全般に欠けている素養だということに気づいた。
- 「土木工学・建築学分野の参照基準について」（建築学科学部生）構築環境built environmentという言葉で二つの分野が統合されることに感動した
- 工学系の参照基準について：自分の学科の学び全体が何を目指すのかがよく分かって基礎科目を含めて学習意欲が出て来た。

教育マネジメントによる質保証

- 「『卒業認定・学与の方針』（ディプロマ・ポリシー）、『教育課程編成・実施の方針』（カリキュラム・ポリシー）及び『入学者受入の方針』（アドミッション・ポリシー）の策定及び運用に関するガイドライン」（平成28年3月31日中央教育審議会大学分科会大学教育部会）

3ポリシーの策定の意義として、内部質保証を推進、高校関係者に明示、社会への可視化を挙げている。

「ディプロマ・ポリシーについて、「何ができるようになるか」に力点をおき、学修成果を明示する際に、日本学術会議の「参照基準」を参考にすることも考えられる。」

調査活動

- **教員のワークショップ：2017年経営学科、2018年度工学部、2019年度医学部**
- **ワークショップ（全体会）：参照基準と現実のカリキュラム改善との距離について、学生の進路と教育、現実のカリキュラムの課題、ディプロマ・ポリシ、カリキュラム・ポリシー、カリキュラムの体系性、さらなる改善点**

ワークショップ（個別インタビュー）：専門分野、担当科目、研究テーマ、全体会の議論について、教育の課題、研究と教育の関係

参照基準の意味

新たなる大学の歴史の始まり

各分野の教育の視覚化、透明化：

- 分野間の協働、大学間の協働を促す。もともと大学（University）はuniversitas（学問共同体）として出発。大学の原点への回帰。
- さらに、現代のuniversitasは「大学」の中で閉じない。中等教育、社会とも連携・協働する学問共同体universitasとして、より良い社会の構築に向けて、学問的良心をもってともに歩む。

海外の動き（吉田先生の報告）

- **英国のQAA**（Quality Assurance Agency）の
Subject Benchmark Statements **61分野**
- **欧州のTuning**のReference Points **30分野**。
- **米国：学会が主導**

「世界への関与の仕方」の思想

- アウグスティヌス（354-430年）は、真理に「与る」ということにラテン語の participation という言葉を充てた。
- 「三位一体論」（第14巻26節「知識（Scientia）から区別されて特別の知恵（Sapientia）とされる観想的知恵は、理性的かつ知解的な精神を、関与によって真に賢くすることができるかたによるのでなければ、人間に属さない」
- ニュッサのグレゴリウス（335-394年頃）は、「関与」に metousia というギリシャ語を充てた。Ousiaは「本質」を表す。本質に関わることで本当の知を獲得できる。

参考：ニュッサのグレゴリウス「雅歌講話」（谷隆一郎他訳 新世社、1991年）

人間の論理、思考の枠を超える本物との関わりの中で真理（真実）を獲得する。